

に召集令状が届いた。昭和十九年、三十歳だった。

夫婦、親子は生木をさかれる思いで、病院に妻子をおいて、三堀氏は東寧の関東軍自動車部隊に入営し、

北鮮の清津港から新瀉に上陸、宇都宮について防衛の任についたところで日本敗戦となり、ただ、号泣した。

三堀氏の妻子は、ソ連の迫害で瀕死の苦痛、言語に絶するものがあつた。生きて日本に引揚げてこれたのは、満州人の協力のおかげであると涙を流す三堀婦人の弁である。

引揚後夫婦力を合わせて茅ヶ崎に家庭を築いて幸せな生活をおくっている三堀氏は、山田悌一総務の教えのおかげだ、なんとしても山田悌一総務の追悼碑を建立すると、精進している。その姿に敬意を表する。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

最後の義勇隊

岐阜県 斎藤 春由

昭和十九年三月、聖戦の名のもとに始まった大東亜戦争も敗色ますます濃く、南方諸島の玉砕の報せ、本土空襲の憂き目にもめげず、国民はまだまだ勝利を確信、日夜防空訓練などに励んでいた。

当時、私は国民学校高等科二年生、満十四歳になつたばかりであり、自分の進路を決めかねており、担任の先生に勧められるまま、満蒙開拓青少年義勇軍に志願していた。

仲の良かった次姉が、北京に嫁いでおり、少しでも近くに住みたかったのも動機の一因となった。

身長百三十九センチ、体重四十一キロ強、整列すれば前の方であつたが、それでも同郷の四人のうちでは二番目に大きい方であつた。

昭和十九年三月十四日早朝、家族や大勢の方々に見

送られながら勇躍我が家を出発した。

岐阜県出身者二百二十余人とともに、小さい体に必要な夢と希望を乗せ、茨城県内原町にあった満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所河和田分所に入所した。

渡満までの農事を中心とした訓練は、すべて軍隊式であり、あまりの辛さと故郷恋しさのあまり脱走する者もあったが、どうにか耐えられたのも、大勢の見送りを受けた手前、歯をくいしばって頑張った。

やがて五月上旬、待望の渡満となり、北満ハルビン市郊外にある満州開拓青年義勇隊ハルビン訓練所第一中隊として入所することとなった。

慣れない氣候風土と粗食に耐え、零下三十度を越す酷寒と闘いながら、農事、教練に励み、いつか立派な開拓者を夢みつつ頑張った。

昭和二十年四月、戦局はますます熾烈さを増し隊員百五十人は奉天の満州車両株式会社へ、戦時勤労挺身隊として歙持つ手をハンマーに換えるべく派遣されていた。

残された我々六十余人は以前にも増して多忙な毎日

となった。人手不足に加え年長者は一人、二人とあわただしく応召される状態となつては、家畜の世話にも事欠く状況となり、ついに遠方の農場は放棄同様の状態となつてしまった。

終戦直前、東安の蹄鉄土養成所に派遣されていた伊佐地君と兼松君が突然帰ってきた。聞けばソ満国境付近ではソ連軍が侵入し大混乱となつており、大勢の日本人がハルビン目指して避難中との話に、改めて戦争を身近に感じた。

やがてたどる苦難の青春の道程を知るすべもなく、夜ともなれば、遠くから大声で軍歌を練習する声がいつまでも聞こえ、満天の星空は明日の晴天を告げるかのように一段と輝きを増していた。

昭和二十年八月十五日、そろそろ昼食かと思つていた時、本部からすぐ帰隊するよう連絡を受けた。何事かと急いで帰ってみると、すでに大勢宮庭に集まつており、天皇陛下のお言葉がラジオで放送されるといふ。生まれながらに「天皇陛下」と聞くだけで直立不動の姿勢をとるように教えこまれていた私たちは、心配

そうになりゆきを見守っていた。雑音の激しいラジオからは何のことかさっぱり分からず、やがて日本は無条件で降伏したこと、日本民族は滅亡したことなど、悲壮な声でしゃべられるのを、炎天下長時間にわたって聞かされた。

「日本は敗けたんか、終戦と敗戦とどう違うんや」
「そんなことないよ、そのうち神風が吹いてきて敵は皆殺しさ」

などと話し合い、不安は残ったがその時は過ぎていった。

起床ラッパも聞こえない翌朝、大量の食糧、被服、甘味料が持ち込まれた。見たこともない缶詰や腹一杯の白飯に有頂天となっていた。

これで義勇隊とも「サヨナラ」だ。日本へ帰れるらしい、などと話し合いながら喜々とした数日が過ぎていった。

数日後、丸腰の日本兵がぞろぞろ炎天下の中市街地の方へ向け歩いて行く。

「日本は負けたぞ。お前達も早く日本へ帰れるぞ」

などと言っている。

しかし、突然窓ガラスを破られたりするし、何となく訓練所襲撃の気配を感じた。やがて今まで従順だった満人たちは手の裏を返すがごとく凶暴となり、白昼集団化しものすごい形相で凶器を手に来襲し、食物、家畜など当然のごとく略奪していった。

加えて進駐してきたソ連兵は、主力を対独戦に割かねばならなかった関係からか、シベリア流刑囚からなる囚人兵が多く、無知で、悪臭を放つ粗末な被服をまとい、マンドリンと呼ばれた自動小銃で威嚇しながら、あらん限りの略奪暴行を重ね、その行状は目を覆うばかりであった。

この惨状を目前にして、勝利の歴史しか知らなかった日本人にとって、初めて敗戦国民としての苦汁を飲まされ、無抵抗のまま、ただ耐えるのみであった。

秋の実りを望みつつ生育した作物は、その収穫を見ることなく無惨にもふみにじられていった。

昼夜を分かたず奥地から続々と避難してくる日本人は、ほとんど丸裸同然であった。泣くことも忘れた幼

児の手を引き、目だけは鋭く光っている。極度の疲労からか、ほとんど仮死状態である。我々はこの姿を見ておもわず目をそむけた。流動物などが与えられ、何を聞いても答えないまま死んだように眠ってみえた。戦争に負けた者の哀れさというには、あまりにも残酷で慰める言葉もなかった。

当時訓練所内には、全滿で八万人とも九万人ともいわれた義勇隊関係者の衣食を賄うため、頑強な倉庫が幾棟もあり、略奪されたとはいえ当面の食糧などには事欠かなかった。

デマとも真実とも分からぬ流言蜚語に一喜一憂の連続であったが、幸いにも終戦の大混乱の中にありながら、我が中隊から死傷者の出なかったのは不幸中の幸いであった。

時おり遠くで聞こえる銃声にもなれ、不安の中にも避難民の方々のお世話などあわただし日日が続いた。日中の暑い日射しも夜ともなれば涼しさを覚え、早くも秋の気配を感じるようになった。昭和二十年九月六日、ウラジオストク經由で帰国できるとの知らせ

に一同歓喜した。ハルビン市内からも集まった男子約四千人は、それぞれ集団を編成して夕闇せまる新香坊駅を無蓋車で出発した。

帰国という軽い気持ちからリュックの中には衣類などとわずかな食糧をつめ込み、心はずでに祖国に飛んでいた。

超満員の無蓋車は、はやる我々の気持ちも知らぬまま遅々として進まず、明け方近くこの地方ではめずらしく樹木の多い街、黄道河子で降ろされた。

これから牡丹江まで約百キロあまりに及ぶ山道を徒歩で出発することになった。一人人通れるほどの道をあげ、両側に大勢の満人が我々の荷物を略奪すべく待ちかまえていた。その中を突き走るように駆け抜けたが、持ち物全部奪われた者もあったという。

ときにこの地方は数年来まれに見る豪雨であり、連日泥沼の道をあえぎながらの行軍となった。全身ずぶぬれとなり、わずかな荷物が鉛のように重い。何かひとつ物を捨てると、数分間はまったく何も持っていないような身軽さを感じるが、すぐ元の重さに戻ってく

る。

当時この山中は、日ソ兩軍の激戦地跡であり、いたるところに兵士や軍馬の死骸が散乱していた。遺体のほとんどは日本兵であったが、おそらくそのまま白骨と化し、北満の風雨に晒されながら大地に帰って行ったことであろう。その悪臭は、秋も終わりを告げるこの地にいつまでもたなびいており、誠に痛ましい限りであった。

地雷火など銃器類も数多く残っていることから火気は一切禁止され、わずかな食糧も食いつくしていた。

ある時、どうしたのか三歳ぐらいの女の子が木に縛られている。

「どうしたの、お母さんは」

と聞くと

「お母さんは、すぐ戻ってくるからと言ったけどまだこないもん」

と泣き声で叫んでいる。哀れこの子は親に置き去りにされたのも知らぬまま、いつまでこの状態で待っているつもりであろうか、悲しげな表情を見つめながら

縄目を解いてやるのが精一杯でどうにもしてやれず、どうか命だけは長らえてくれることを祈るのみであった。

そのころ、敗戦病とも呼ばれていたアミーバ赤痢が蔓延して下痢症状がひどく、警備のソ連兵に追い立てられながら隊列に戻るのが精一杯で倒れる者も多かった。

不眠不休の四日間、どこをどう歩いたのかさっぱりわからないまま海林の街に到着し、旧日本軍兵舎跡にたどり着いたのは九月十一日夕刻であった。破壊されつくされた文字どおり乞食小屋同然の建物であったが、夜露をしのぐには充分であった。逃げ遅れた多くの難民との同居生活であったが、互いに無一文では助け合うことも出来ず、負わされた宿命とでもいうのか敗戦国民の悲哀をまざまざと体験させられた。

九月二十三日、荒廃おびただしい牡丹江の街に徒歩で到着した。街中あげての戦勝記念か、爆竹が鳴らされる中、罵声を浴びながら逃げるように駆ける我々の姿は、戦勝国の彼らにはさぞかし心地良いものに映っ

たであらう。

駅前の映画館跡地らしい場所が最初のねぐらとなったが、先住者で超満員であり無数の蠅が飛び交い、爆音とも表現できるすさまじさに軒下で起居することになった。

一日拳大の黒パン二個と岩塩汁一杯の食物では、目の落ち込むような空腹感を覚えたが皆一様にあんどし、元気な者はソ連軍の使役に出かけ、わずかばかりの食物を手にして帰る生活が続いた。

しかしながら蔓延する伝染病と食糧不足による栄養失調で倒れる者も多く、ついに拓友藤田寿栄治君の死に遭遇することになった。

医者もいない、薬ひとつない中での見殺し同然の死であった。弱冠十五歳、帰国を目前にして異国の地で病没された心痛を察する時、明日は我が身といい聞かせ思わず合掌せずにはいられなかった。ハルビン残留中隊最初の犠牲者であった。(平成三年七月、田中中隊訪中団としてこの地を訪れ、ささやかではあったが供養を行い、出身地美山町の霊前に砂を供えご冥福を

祈った。)

十月に入ると連日貨車で出発して行く。寒くならないうちに帰してくれるんだなと喜んで待っていたところ、帰国どころか、二度と訪れることはないと思っていたハルビン訓練所へ逆送還されたのである。いったい何のために一か月余りも混乱の中、犠牲者まで出しながら往復させられたのであろう。憤懣やるかたもない十月九日夜、新香坊の駅に降ろされたのである。

帰国への望みも絶たれ、着衣もボロボロのまま中隊跡へ行って見ると本部の建物は焼けて無く、婦女子難民収容所とは名ばかりで、おびただしい病人集団と化しており、飢餓と疫病の地獄絵図であり、直視できないほどの惨状であった。毎日多数の死者が葬られ、その大半は幼い子供たちであり、その隣は母親の墓ともなった。我々は自主的に埋葬するための墓穴掘りに参加したが、すでに地上は完全に凍結しており、数十センチほど掘るのが精一杯であった。

訓練所病院付近や朝鮮人部落に近い農場は、無数の土饅頭が広大な地域にと広がって行った。遺体はすべ

て東南（日本方向）に向けて埋められ、涙ながらに合掌して立ち去る母親の後姿がいじらしかった。思えば北滿の僻地から命からがらたどり着き、ほっとする間もなく我が子との悲しい別れであった。

ひとつの生命がこの世から消えて行く。蔽肅なことであるはずが日課のごとく扱われており、亡くなった方々も開拓団員、埋めてあげるのも我々開拓団関係者であった。

わずかばかりの謝礼と供物を無断でちょうだいし、明日をも知れず病床に伏している拓友と分かち合いながら今の境遇に涙した。そうした中にも病人は次第に数を増し、重苦しい空気の中で拓友相互の葛藤などに悩まされ、丈夫な者はこっそり満人街へ職探しに出かけたまま帰らなかつた。

収容所付近をうろついていた時、私の家で働かないかと親切そうな満人に誘われ、渡りに舟と雪道の中恐る恐る後について行った。

着いた所は香坊の街はずれにある監獄であった。背丈の何倍もある頑丈なれんが塀が周囲を嚴重に取り囲

んでいた。一瞬嫌な予感はしたが柔和な人柄だったし、他に行くあてもなかったので勧められるまま中に入った。いわゆる囚人が収容されている方向は、また高い塀があり監獄内とはいっても全く身近に感じなかつた。近くには飛行場があり毎日爆音が聞こえていた。

山形と名乗る六十歳くらいの背の低い男性と、京さんと呼ばれていた四十歳くらいの無口な日本人女性と三人で仲良く仕事を分担しながら一生懸命働いた。特に人の嫌がる仕事は真っ先に取り組んだ。京さんはいずこからか毎日通っていたようだ。

仕事は洗濯屋であった。監獄の制服らしい物ばかりで、山と積まれた衣類に水をかけながら棒で叩き、次に大きな釜でそれを煮たてて足で踏み、絞り出してポイラー室の天井に干すのが主な仕事である。部屋の中での仕事とはいえ、外は零下三十度を超える毎日の水仕事は手足の感覚がまったく無くなっている。そのうえ綿入れの服が水をふくみ、重さと悪臭で取り扱うの大変苦勞した。

しかし、最初のころは水を使っていたがポイラーの

湯も使えるようになったし、食事もどこから運ばれてくるのか、鍋一杯の粟飯が食べ放題だったのが何よりうれしかった。衣類も粗末な物であったが清潔な物がたくさんあり、あれほど悩まされたシラミもいつの間にかいなくなっていた。

寝泊まりは、山形さんと二人ボイラー室の片隅ではあったがゆっくり休むことができた。盃一杯ほどの支那酒をなめるように飲みながら身の上話を聞かせ、大きな軒をかいてすぐ寝込んで見えた。環境がよいのでだれか使ってくれないかと頼んでみたが、なぜか良い返事は帰ってこなかった。

十一月下旬頃、食い物などを持って訓練所を訪れた和田君、堀江君（いずれも故人）たちが寒い部屋の中で寝たきりであり、粟のにぎり飯をうまさうに食べてくれた。同じ生死の境をさまよい歩き、互いに励まし助け合ってきた友の哀れな姿に接するとき、運命とはいえ我が身の幸せをつくづく有り難く思った。

ちょうどそのころ、田中中隊長が突然来訪された。聞けば隊員や家族のことを心配され、敗戦後の混乱の

なか単身奉天より訪ねられたとのこと涙ながらの再会であった。大半の隊員は遠方まで強制使役に狩り出され留守中であったが、居合わせた渡辺君、守屋君（故人）をまじえ、今日までの苦勞話や現在の惨状を火の気の少ないあばらやで話あった。

十二月一日、小雪舞う訓練所を先生と身重な奥さん、それに私の三人が馬車にて出発した。途中多くの死体が放置されているのを横目で見ながら、予定より大幅に遅れて先生の知人ハルビン市内の片田さん宅に落ち着いた。

ここで二泊ほどお世話になり、いよいよ奉天へ向け出発となった。

大混乱しているハルビン駅から乗車のさい群がる暴徒のため手荷物を略奪されそうになったが、どうにか無事乗車することができた。

満員の車内を徘徊するソ連兵の暴行におびえながら不安の連続であった。

真夜中、徳恵（新京付近）あたりで難民の車両に我々の列車が追突し、貨車ごと谷間に転落、寒さをし

のぐためか中で火を燃やしていたため全員焼死された模様である。誠にお気の毒に耐えなかった。(昭和五十四年六月、岐阜県農業訪中団の一員としてこの地を通過したさい、往時をしのび心からなるご冥福をお祈りした)。

死臭に涙する我々をよそに、遅れをなじる満人たちが大声でどなり散らしていたのが印象的であった。

十二月五日奉天駅無事到着。しかし、駅前の混雑ぶりは一体なんと表現したらよいか渡満途中この駅で下車した記憶では、静かで美しい印象であったが、わずかばかりの荷物を手に右往左往する多くの日本人たち、一か所にあたむろして人々の動きを警戒している一団。いずれも北満から命からがらたどり着いたおびただし数の難民たちであった。

所々まだ死体が放置されたままになっている中を満州車両社宅に到着した。久しぶりに皆と会い、ハルビンの現状や苦勞話を夜遅くまで語り合った。

一夜明けると私の全財産であるリュックは盗難にあつて無一物となり、まったく途方にくれてしまった。

敗戦の混乱期の真つ只中、人の物は俺の物、無くした方が悪いぐらいの世の中だったが、着の身着のままこの寒さを耐えていかねばならない。

当時満州車両はソ連軍の占領下であり、待遇もきわめて悪かったが、飢えをしのぐだけのことはできたようだ。しかし、新参者の私には働く場所とてない。仕方なくソ連軍の使役に参加し、持ち帰った物を金に換えて生活する日々が続いた。会社勤めをしている者も、ノルマの厳しさなどから会社を見捨て、近くの満人の家で働く者も多かった。

同郷の長江光芳君は、手荷物とてないまま正月の朝別れて行ったが、それ以来現在までまったく消息不明であり、また同郷の宮島敏則君が不慮の死を遂げられたのを見届け、食うために職を求めて異国の地を流浪する身となった。

私は満人の店をのぞいて回った。「使ってくれないか、病気は無いし働くから、食べさせてくれるだけいいから……」と平身低頭頼みこんだが、悪評だった日本人を待っている店などあるはずもなく、顔を見るな

り犬猫同様追い払われた。

それでもどうにか落ちついた先は街はずれの煎餅屋であった。大豆や高粱を水につけ、軟らかくした物を石臼で挽き、どろどろになった物を鉄板上で紙切れのように薄く焼き、野菜などを巻いて食べる安くて庶民的な食べ物を作る店である。仕事は、石臼を挽く驢馬の面倒と火の番であった。真夜中の餌やり、豆類の仕込みなど夜明けから真っ暗になるまで働いた。ここへきて生き延びる手段は、体を酷使し頭を使い、その日その日をいかに過ごすかそのみに専念した。腹一杯食べられたし、また何を食べてもうまかった。

そのころから引き揚げの話が時々聞かれるようになり、田舎においては連絡もとれないことから、惜しむ老夫婦に別れを告げ街の中心部で働くことにした。

そこは、六十歳近い先生と呼ばれる夫婦と息子夫婦、生まれて間もない女の子、それに妹らしい六人家族で大きな家であった。三宅君、川尻君と一緒だったので心強かった。仕事は、当時電気が途絶えていたため、粗末な自家発電機を交互でハンドルを回し、その力を

利用して自転車の部品（スポーク）を作っていた。長男は日本語が非常にうまく、戦争中は日本軍の通訳をしていたことを自慢げに話していた。

「馬鹿らしい」と言った言葉に激怒し、ひどい仕打ちに合ったことを覚えてる。東濃弁というか他意のない言葉の「馬鹿」と聞こえたのがよほど気にさわったのだろう。

無報酬ではあったが一日二食の高梁飯と、屋根の下で熟睡できるのが何よりの魅力であった。

隣に床屋を営むよく肥えた老夫婦が住んでいた。子供が無いらしく「俺の子供にならないか」などと親切に言ってくれたり、何かと食べ物を差し入れてくれた。「日本では親が泣いて待っているだろうに」と言った話を聞かされた時に母の姿が目につかび、望郷の念はひとしお募るばかりであった。

幾度か帰国の話を聞きながらその都度裏切られていたが、寒さも遠のいた五月の終わり、人伝に引揚げの話が進んでいることを知り、近くで働いている者たちとも連絡をとりながら、中隊主力がいる満州車両へと

集結した。

身ひとつ、着替えとて無い我々を哀れんか、主人が衣類、食糧など整えてくれた。そして分厚い手で握手をし道中の無事を祈ってくれた。今思えば誠にありがたく、また唯一の見送り人であった。

自分の荷物は何ひとつ持っていない。まったくの手ぶらである。食糧は炒り豆がポケットに少しあるだけだ。もちろん無一文である。

こうした乞食同然の我々は第一避難民と呼ばれ、一番先頭に立って歩いた。こんな身なりで親に会うのは気恥ずかしかったがとにかく帰りがかった。

集結地北奉天駅で所持品の検査が行われたが、無一物の我々は黙って通過させられた。

そんな我々を見て乗船するまでの約束で荷物を担がされ、前金で三百円もらった。これで当分は命がつけられると思うと重い荷物も軽く感じた。

すし詰めの無蓋車に押し込められ、乗船地コロ島へと出発した。たびたび停車するが、いつ発車するかも知れないので降りることも出来ない。正常なら五時間

ぐらいの道程が三日間かかり、ようやく錦州に到着した。乗船待ちの日本人でごった返しており、屋根のある所は婦人たちにゆずり、我々は野宿で過ごす毎日となったが何ら苦にならなかつた。

収容所のまわりには、中国人の露店が無数に並び、わずかな所持金はほとんど食べ物に消えていった。ここで約一週間ほど暮らし、ようやくコロ島に到着した。久しぶりに海を見た。祖国日本に続く青い海である。疲れ果てた体ではあつたが、一晚中丘の上から飽きることなく眺めていた。

そのころ、帰国のさいは日本円で千円しか持ち帰れないことを聞いていたが、すでに持ち金はほとんど無く、丈夫なうちに一刻も早く帰国したいばかりであった。しかし、使役に出れば報酬が出るとの話に、病弱者を除くほとんどが参加した。見上げるような丘の上まで赤れんがを運ぶ仕事で、炎天下の作業はつらく、流れる汗を拭う物とて無かつた。乗船ぎりぎりまで働いたが、手にしたのは七百円ぐらいであつた。

いよいよ乗船の時が来た。何隻かのアメリカ軍上陸

用舟艇が岸壁に横付けされている。炎天下、長時間の行列にもかかわらず、誰一人不満をもらす者はなかった。厳しい持物検査が行われ、一人でも違反者が出れば全員乗船できないとの達しであったが、無一物の我々にはまったく無縁であった。

無事乗船完了、船は静かに出港した。全員甲板に上り思いきり手を振った。苦勞を分け合った友の靈を残して去る胸中は、夢にまで見た帰国の喜びと交錯して複雑な心境であった。さらば満州よ、皆それぞれの思いを秘めながら、再び訪れることのない大陸で流した血と汗と二年余りの歳月は、生死の境に遭遇するたび強固な精神力と行動で生き抜いてきた貴重な体験であった。

狭苦しい船内での起居であったが、帰国への望みがかなえられるとあって明るい雰囲気を感じられた。

残念なことに船中でも死者が出た。祖国を目前にして亡くなられた方のご心痛を察するとき、命からがらながらも生き長らえている自分の幸せをしみじみ感じた。

「日本が見えるぞ」の声に全員甲板にかけあがった。船上から見る祖国日本の木々の緑は本当に美しく朝日に映えていた。松林もある。竹藪も見える。夢にまで見た祖国の風景に全員が涙また涙であった。

佐世保港に入港したが病人が出たため船中で一週間ほど待たされ、博多港に上陸したのは、昭和二十一年六月二十七日早朝であった。

あれほど悩まされたシラミも強力な消毒剤の散布によって、すっかりその影も無くなっているのには驚いた。

我々引揚者目当てに出ている多くの露店では、有り金はたいて食物をあさった。三州煮と呼ばれた今風のもつが味噌で煮てあるのが安くてうまかった。

満員の引揚者専用列車に乗り込み、荒廃した日本の風景を眺めながら翌夕方岐阜駅に到着した。引揚者の皆さん、大変ご苦勞さまでした。と横断幕が掲げられ温かく出迎えて頂いた。その夜は、集会所らしいところで一晩お世話になった。

懐かしの多治見駅に降りたのは六月三十日、陽射し

の強い午後であった。

思えば土の戦士として歎呼の聲に送られ、勇躍出発してからすでに七百六十日余りが過ぎ去っていた。岐阜で支給されたわずかの衣類すら重く感じたが、夢にまで見た故郷にたどり着いた喜びは感無量のものがあった。

街の姿は疎開とかでずいぶん変わっていたが、「リソゴの唄」が聞こえ、野菜の花が咲きそろう道端を眺めながら、ゆっくり、ゆっくり家路に向かった。

迎えてくれた母は何も言わず、上から下まで確かめるように見つめていた。温かい家族に再会できた喜びは言葉にならなかった。家に着いたあんど感からか、栄養失調が原因で寝たきりになってしまった。その間、一度にたくさん物を食べては体に悪いからと、毎日熱いお粥を食べさせてくれた兄夫婦の看護のおかげで、二か月ほどで起きられるようになった。今少し帰国が遅れ、また家族の協力がなかったら今日の私は無かったであろう。

全身に吹きでた満州疥癬で、人前では恥ずかしくて

裸にもなれず、下着にべったり付いた膿をはがすのに一苦労した。

かつて少年の描いた五族協和、王道楽土の夢は無残にも挫折してしまった。しかし、私はこの道を選んだことを悔いてはいない。

今日まで戦場に、また家庭に幾多の困難に遭遇するたび、苦難に耐えた青春時代を思い起こし、いかに励まされ勇気付けられてきたことか。

還暦も過ぎ、無事職場も定年となった今日、今でも胸を張って満州時代を語れるのを誇りに思っている。

【執筆者の横顔】

斎藤氏は、昭和二年生まれ岐阜県人、満十四歳で岐阜県から二百二十人とともに満蒙開拓義勇軍として茨城県内原で訓練を受講し、昭和十九年五月、勇躍渡満した。

ハルビンの大訓練所生活で日夜活発な訓育に精出していたところ、二十年四月、奉天の満州車両隊に戦時勤労挺身隊として派遣された。この挺身隊で作業に従

事していたところ、今度は、ソ満国境の東安蹄鉄土養成所に入所を命ぜられて勉強していた。

ところが二十年八月九日、ソ連軍の不法越境から戦争が始まった。国境には関東軍は手薄で、ソ連軍は無風の中を侵攻して悪辣悪道の暴行、略奪、殺傷の限りをつくしたので国境に住んでいた日本人は言語に絶する悲惨な目にあつた。

八月十五日、無条件降伏したのは、齋藤氏らは東安から徒歩でソ連軍や地方の暴民の間をくぐり抜け、豪雨にあつたり山を越え河川を渡り、途中日本軍人の屍累々たる所、又は立木に三歳ぐらいの女児がくくりつけられて泣きつかれて眠っているのに出会つた。齋藤氏らは、この女児を助ける力もなく立ち去つてきたことを、今もこれ进行めぐらして眠れないと語る。

牡丹江からハルビン近くの新香坊駅について生きるために監獄の使用人となつて屍運搬をした。機会を窺いハルビンより無蓋車にもぐりこんで新京へ、更に奉天へ十二月五日着いたが、全く生と死の共存する社会

を生きのび、翌昭和二十一年五月コロ島について荷物運搬の運賃七百元を貯めて米軍の上陸用艇で佐世保に上陸し、延々岐阜県、故郷の多治見駅に引揚げて親兄弟の出迎えて思い切り嬉し泣き、六か月ほどして栄養失調から健康体にもどり、労苦を克服してきた大陸満州の体験を誇りをもって語り、戦争は二度とくりかえしてはならないと心血をしばって話された。

引揚後の齋藤氏は、電電公社の技術員に採用され、上司、同僚、後輩から信望厚く定年まで四十年勤務し、公社から感謝状をうけている。子供は学卒してそれぞれ、二人とも成人し家庭をもち、老夫婦は悠々自適、平和な生活を営みながら、引揚者団体岐阜県連理事をつとめて援護事業に協力している。まだ六十三歳だから、今後とも社会福祉に奉仕するとの意欲をきき、さすがの引揚者魂に敬意を表した。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助